

ふるふりの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるふり 風

第三十五号 (二〇〇九年四月)

風に吹かれて (09 4) 白井啓治

『もう桜 間抜けな四季が過ぎて行く』
近年、四季にメリハリがなくなってしまうた。

映画の編集に不可欠な、カット変わりの決め、止め(トメ)の間がなく、ダラダラと、そしてセツカチに四季が移ろって行っているようである。これは地球の温暖化の所為なのであるが、季節の移ろい迄もが余裕無くあくせくと走り回っているようでは、近い将来、いや明日にも緑の自然が消えて火星のような砂漠の星になってしまうだろう。火星の探査衛星からのデータを解析すると、火星にもかつては水があった痕跡がある、といわれている。もしかしたら地球のような四季と呼べる穏やかな季節の移ろいがあったのかも知れない。風に吹かれ、風に戯れながら時の移ろいを感じていたいと願う私にとって、あまりにけじめや、止めの無い四季の移ろいは病んだ痛みのような感覚しか伝えてくれない。

けじめと言えば、石の上にも三年と、何があっても最低三年は継続しようとしたこの月刊ふるさと紙であるが、この五月で丸三年になる。この三年間を振り返り、参加者の全員が、一度も原稿の提出をパスすることなく書き続けてきたことは、

驚くべきことである。

三年間なんて大したことがないように思うかもしれないが、三年間毎月原稿を書き続けるということは、例えば原稿用紙一枚であったとしても容易なことではない。このことは全員に褒め言葉を与えても良いだろうと思う。

自己表現の言葉としての文章には上手下手はないのですよ、と言い続けてきたのであったが、言葉を書き直して始めて以来、学校教育の中で実体のない上手な文章などというくだらない事を教え込まれ、それがいまだに抜けきれないで、何度か書き直しを言われる人もいる。しかし、それでも一度も脱落しなかったことは、自分の言葉を確りと誰かに伝えたい、と切実に思ったからに違いないと思う。

私は、あらゆるものの活動の定着について、七五三説という考えを持っている。先ず三年、次に五年、そして七年が無事に過ぎれば、その活動は(企業であれ団体であれ)ひとまず定着し、その後は何が起ころうとも七年間に培ってきた自助努力で継続できるようになる、という考え方である。だからこの「ふるさと風の会」も五月の第三十六号を刊行したら、次の五年に向けての一つのけじめ、止めを持って、新たな自己表現・ふるさと表現の志向を構築していかなければならないと思っ

ている

三年のけじめを迎えるにあたって、最近嬉しい問い合わせが、常世の国の人たちから寄せられるようになった。それまでは他県・他市の方々からしか問い合わせがなかったのだから、本当に嬉しく思っている。成程「石の上にも三年」になると、気にかけて、応援して下さる人の声も少し大きくなるのだな、と実感している。

歴史ガイドに同行して (11) 兼平ちえこ

六世紀、日本に伝わった仏教は、推古天皇・聖徳太子の時代にその積極的な普及政策により全国に広まった。

八世紀前半、日本国内は、内乱や凶作に加えて疫病がはやり、藤原氏(藤原光明子)・聖武天皇の皇后、光明皇后となる…の兄達、前常陸国守藤原宇合ら四兄弟があいついで病没)等、有力貴族を始め多くの人々が亡くなった。

こうした混乱した社会を仏の力で救ってもらおうと、国土安泰、万民息災を祈願して天平十三年(七四一)、聖武天皇は、国分寺創設の詔を下され、全国六十六ヶ所に国分増寺、国分尼寺の二寺が国ごとに建立されることになった。全国六十六ヶ所の中で常陸国は大国に区分され、国府が置かれた石岡に天平十三年の建立の詔が出た後、ほどなく増寺、尼寺が成立したとみられる。

両寺とも、すでに古代において兵火に焼かれ、その後中世に再建されてからも兵火で焼失するなど、当初の姿を伝える建築物は皆無だが建物の礎

石の保存状況が良好であることから二寺とも、昭和二十七年三月（一九五二）に国の特別史跡に指定された。

今回の「常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内」は、⑧常陸国分増寺跡についてご紹介しましょう。

所在地、石岡市府中五丁目一番。常磐線石岡駅の西北一キロメートル。東側に県道石岡く笠間街道が通り、市街地の北端に位置している。現在跡地には、真言宗智山派、浄瑠璃山東方院国分寺があります（大正中期末寺千手院を合併、再興した）。本尊は、薬師如来。その境内に創建当時の礎石等の遺構に、ありし日の栄華の世を偲ぶことが出来ます。

常陸国分増寺の正しくは金光明四天王護国之寺と称し、金字金光明最勝王経一部を安置した七重塔を設け、常住の僧二十名と最勝王経十部を置いた。寺院の財政は封古（ふこ：古代、俸禄の対象となった戸）五十戸、水田十町歩、十ヘクタールの作物によって賄われた。

南大門、中門の各大門を構え、廻廊は中門の両側から東西にのび、堂塔伽藍は仏教芸術の粹を集めたものであった。

昭和四十四年からの調査を始めとして、昭和五十二年、次いで昭和五十六年から二次にわたる発掘調査で金堂、講堂の規模が確認され寺域も大きいことが判明した。寺院全体は約東西二七〇メートル、南北二四〇メートルの規模で全国の国分寺の中では大きい方であった。また発掘調査で出土した遺物は瓦が主体であるが、その中でも創建瓦（複弁十葉蓮華文軒丸瓦：ふくべんじゅうよううれんげぶんのきまるかわら）は、平城京羅城門跡で

発見された軒丸瓦と同系の模様であることが注目されました。これは国分寺建立に際し、当時の政府が瓦工の派遣などを含む技術指導をしたことを物語っている。

これらの発掘された瓦等遺物は常陸風土記の丘公園内の展示室と石岡市民俗資料館に展示されています。

現在の国分寺境内に七重塔心礎と思われる礎石が柵の中に安置されている。石の寸法は直径約二メートル、短径約一・八メートル、柄穴（ほぞあな）中央径五十二・八センチメートルである。

昭和二十七年一月、石岡駅から水戸街道に通じる産業道路開設の為の工事中に妨げとなった大石を取払うことになった。ところがこの石は一二〇〇年前に建立された常陸国分寺の七重塔の塔心礎であることが確認され、六日ばかりでコロで元の国分増寺跡に収まることになりました。（写真集、いしおか昭和の肖像に運搬の様子の写真が掲載されている）

近年の研究では、今まで判明していなかった七重塔の位置が、寺域東側に推定されている。

四月八日、花まつり。国分寺境内は、お釈迦さまのお誕生をお祝いして、桜の花と人の華で歓喜の広場となる事でしょう。是非ありし日の国分増寺の境内（寺の東側と推定されている七重塔はNTTの白と赤の塔のあたりとご案内している）を思い浮かべながら甘茶を頂戴してみても如何でしょうか。

尚、現在の国分寺内の薬師堂は、筑波山を守るため東西南北四ヶ所に建立された「筑波四面薬師」、旧八郷町の菫蒲沢薬師堂、旧真壁町の薬王院、旧新治村の東城寺、そして旧八郷町十三塚の山寺（廢

寺）のうちの十三塚山寺の山中薬師を（前の本堂は明治四十一年の大火で焼失）明治四十三年（一九一〇）に移したものだそうです。

その他、国分寺境内でのご案内が残っておりませんが（千手院山門の彫刻について、国分寺鐘伝説、都々一坊扇歌堂、中門跡の仁王門）次回とさせていただきます。

参考資料 石岡市史（上）・国分寺の由来

・二二〇〇余年の世 黙して語る 塔心礎

・ピルマヤキノシタ ピンクの花咲く丘

・ちよと待とつと 赤い息吹の桜さん

ちえこ

じゃがいもを植えながら「自立」を考える

ふたば自給農園 松山有里

3月20日お彼岸を過ぎると、一大イベントじゃがいもの植え付けが待っている。先日数人に声をかけて、お手伝いしていただいた。遠くからは東京からも来てくれた。総勢9名で約70kのじゃがいもの種芋を植え付けた。

去年はじゃがいもは不作だったようで、本当なら5〜6月まで出荷できるはずが、2月の中旬ごろに底をついた。種いもが足りなかったと思いきや、これは不作が原因とのこと。7月の収穫のときに吉とでるかどうか。

3か月という短期間で収穫ができ、しかもほぼ1年中保存ができるというじゃがいもは、なくてはならない野菜だ。じゃがいもの名の由来は昔オラ

ンダ人が長崎にジャワ島のジャカルタから持ち込んだから「じゃがいも」というらしい。ひとつの野菜をとってみても日本にずっとあるというわけではなく、いろんなストリーを持っている。

植え付けの当日、私と彼が先頭で鋤をふり、他2人が2回目のさくりをし、あと数人が肥料を入れ、種いもを置く、土をかける、のチームプレーでなんと4時間で植え切った。来ていただいた皆さんには本当に感謝感謝の雨あられである。

今はこんなふうにも自給以外のじゃがいもを鋤でさくって植えるなんてことをしている農家はめったにいない。私たちも相当参ったが、手伝いに来て下さった皆さんは翌日相当地にこたえたはずだ。それにも関わらずこの仕事に関われたことについてとても満足してくれて、収穫のときにはぜひ声をかけてください、と言ってくれた。

鋤をひたすら振りながら、なぜこんなにたくさん人に手伝ってもらっているのだろう、とふと思った。なぜ機械を使わず鋤で使っているのか、なぜ他人に「手伝ってください」と言うのか？そう考えるとこの状況ではとても自立した農家とはいえないと思う。

私は以前障害をもつ人の自立生活に関わる仕事をしてきた。そこでこの「自立」という言葉、たごができるほど耳にして、自分自身も自分の自立について考えてきたはずだ。

スワラジ学園でも「自給自立」という言葉のうえに百姓の暮らし方を教えてもらった。この環境に来てから、都会生活における「自立」とこのよな農村における「自立」とは意味が違うように思えてきた。

今までの都会の生活のなかで、自立せねば、一人でも生きていける強さを持たねば、そんなことばかり考えてきたような気がする。ここへ来てからそれが大きく違っていたことに気がついた。人は誰かに助けてもらわないと生きていけない。このような自然に囲まれている場所ならなおさらのこと。

ひとりで2年間畑をやってきて、「よく一人でやってるね」とあちらこちらで言われた。はじめは「一人でもできる」ということに満足したし、一人でやらないと絶対に得られなかったであろう数々のすばらしい贅沢な時間も持った。でもそうこうするうちに、一人でできることのみならずさのほうで際立ってきた。「一人ではできない」ことに実は本当の豊かな時間があるのではないだろうか、と。

「一人では生きていけない」のであるから、当然いかにうまく人と一緒にやっていけるのかが問われてくる。それが人が豊かさを感じるための根源的能力ではないかと思う。この場所で問われるのは「一人では生きていけないという強さ」なのだ。

お互いがお互いを支える関係性のなかで、ようやく人は生きていくことができる。誰かに「助けて下さい」と言うことで、その関係性の扉が開かれるのかもしれない。

なるべくたくさんの人に「手伝ってください」と言つて、なるべくたくさんの人と関わりを持ちたい。お互い様であるから、私も皆さんにお手伝いできることでお返ししたい。そして一緒に鋤や鎌でする畑の魅力を共有したい。なぜ鋤鎌農業をやるのか、それは自分の体がそ

れを気持ちいいと感じ、仕事を楽しくすることが出来るからだ。ともに心豊かになりましょう。当農園のモットーは「自立しない」こと。これから、みなさん、ふたば自給農園をどうかよろしくお願ひ申し上げます。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2 1 5 8 6
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

梅の里

小林幸枝

すでに桜の花が満開になりかけており、まだ四月になっっていないのに、随分と季節遅れのような文になってしまっています。でもまだ一ヶ月も過ぎていないし、三月なのに変な気分。

三月一日のことでした。オカリナの野口さん宅へ午後のお茶をしに出かけた。二月公演での反省会や、朗読のCD製作の打ち合わせなどが終わり、犬のケンケン、猫のタマちゃんの散歩がてら梅の花を見に出かけることになった。犬と猫と一緒に散歩に行くなどあまり聞いたことがないだろうと思います。野口さんの家のケンケンとタマちゃんは、いつも一緒に散歩に行くのだそうです。

リードに繋がれ、野口さんと一緒に歩くケンケンの周りをタマちゃんがグルグル回りながら楽しそうに散歩をします。とっても不思議な光景だった。リードの無い、フリーのタマちゃんが、ケンケンにちよっかいを出しながら大はしゃぎに散歩するのです。

ケンケンもタマちゃんも子供の時に捨てられていたのを、野口さんが助け、家族にしたのだそうです。タマちゃんは、捨てられたときカラスか何かに突かれたのか、片目が潰れています。でも、ケンケンをお父さん代わりに、遊び相手に、元気で明るく素直に育っています。

犬と猫と一緒に散歩をするのにびっくりさせられたのだったが、梅の花見にもびっくりだった。梅の花を見ましようというから、数本の梅の木かと思っていたら、山の斜面一杯に広がった梅林だったのです。真正正銘、本当の梅の里でした。

咲き乱れる梅の花の下を、ケンケンとタマちゃ

んが楽しそうに駆け巡っています。あたり一面梅の花の香りが流れ、二月公演の里子の中にある「大地の舞い」そのものを感じさせる景色でした。

抜けるように晴れ渡った青い空、甘い香りの声を聴いているうちに、夢を見てしまいました。眠っているわけではありません。でも、満開の梅の花の出す甘い香りに乗って舞を舞っているのです。昼間なのに月光の下に「宴に酔うて酔いしれて暁の待つ」と舞を待っているのです。

舞を舞う私を、ケンケンが不思議そうな顔で見えています。ケンケンに目配せをすると、ケンケンは突然イケメンの美男子に変身したのです。私は、少し寒くなかったので、イケメンに変身したケンケンの胸に抱かれました。ふわふわと暖かい体温に包まれた私は、胸の中に眠ってしまいました。

風に飛ばされた梅の花びらが眠っている私の顔に落ち、ひんやりと私を目覚めさせてくれました。誰かにじつと見つめられているような気がして、しつかりと目をあけると、ケンケンとタマちゃんが私の顔を見つめていました。

ケンケンと目で話しました。
「イケメンに変身したままでいてくれたら良かったのに……」

ケンケンが私に何かを応えようとしたら、
「ダメッ！ ケンケンは私のケンケンなんだから」

とタマちゃんが尻尾を大きく膨らませてそう言いました。

「あくあ。常世の国の恋物語を舞う私の前に、犬のケンケンじゃない、本物のイケメン男性が白馬に乗って現れないかな……」

満開の梅の花の香に浮かれて、しばしうら若き

乙女に私も変身。次は、桜の花に恋をして夢を見ましょう。

文化は景気回復の特効薬

工房オカリナアートJOY 野口喜広

先日、日本が野球の世界ド・ベースボール・クラシック(WBC)で二連覇に輝いた。手に汗を握るとはよく言ったもので、こういう戦いの事を言うのだろう。特に日韓戦はスポーツの域を超えた国同士の戦いのようだった。

平日だというのに、テレビの視聴率が34%に達したというから驚きだ。どれだけの人達が仕事そっちのけで観戦したのだろうか。

なかなか調子の上がらなかったイチロー選手もさすが決勝戦では素晴らしい姿を見せてくれた。スタートはこういうものだ。イチロー選手の頭の中では、最後は「俺が打って勝つ！」というパターンが完全にイメージで出来ていたのだろう。とにかく久しぶりの感動だった。

三年前の世界一の瞬間、私は某建築会社のオーピングパーティーで演奏の仕事だった。皆会場のテレビに釘付け状態だった事を記憶している。「やったー！ 日本、世界一」の歓声で大盛り上がり。そのおかげで演奏はその盛り上がりそのままスムーズに進行した。

今年その瞬間は、自宅でディーラーの方と車を買う商談をしている最中だった。値切る予定が「日本二度目の世界一」のアナウンスで気分を良くして「まつ、良いか」でサインをしまった。

(後悔先に立たず)

この世界一の効果によって、日本中で消費もかなり上がったのでは……。もしかしたら定額給付金より、人の心を揺れ動かす感動の方が景気に良い影響を与えたのではないだろうか。

テレビの街頭インタビューではこんな質問がされていた。

「今回のWBCの盛り上がりの原因は何ですか？」

その答えの第一位「政治不信、会社倒産、リストラ：：、百年に一度の経済危機などからくる閉塞感を感じる世の中であって、ひと筋の希望の光がWBCだった」そうだ。

このように気持ち晴れてこそ景気も回復するはずだ。こういう時代だからなおさらスポーツや音楽、芸術など文化の役割はとても重要なのだ。特に日本初、ことば座の朗読舞劇なんかは、この常世の国が生んだ最高の文化だ。人間の精神生活に大きな活力を与えてくれるのが文化である。そして文化から与えられる活力をもとに豊かな暮らしが創造されていくのだと思う。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一滴みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2 4 6 5

0299-55-4411

『神の概念』の創出

菅原茂美

人類の長い歴史を遡ってみると、古代に少数のグループが移動中、台風・地震・山火事・火山噴火などに遭遇すると、恐怖に慄き、肩寄せ合って一歩も動けなくなつたに違いない。

そのような時、数十万年前、知能発展途上の我々の祖先は、なんとはなしに自分達の行いに、なにか過ちがあり、天か地の、超自然的な、絶対的な『何か』が、自分達の行いを怒っていると感じたに相違ない。

そうなると、群れの中の長老とか、リーダー的な立場の者が、『あの時のあのやり方は、まずかった。今後、二度とあんなことはしないと、約束をし、怒りを鎮めてもらうよう、みんなでお祈りしようではないか』と、自然発生的にそのような考えが起こり、なにかしら、抗いがたい『神』のようなものを、みんなが心の中に感じ取り、強く認識するようになったと思われる。

【聖書には、神が、泥からアダム(男)を創り、アダムの肋骨から、イヴ(女)を創って、人類が誕生したことになっている。しかし神が人を創ったのではなく、逆に人間が、『神の概念』を創りあげたのである。

なお余分なことだが、生物は本来「雌仕様」が基本。遺伝子がみな同じのクローン増殖では、環境の激変に耐えられず、多様性を持たせるために、7億5千万年前、雌オソリーの生物は、やむなく「雄」というものを生み出した。】

そのようにして、原始的な宗教が芽生え、誓いを述べ・反省をし・願い事をする対象として『神』をはっきり認識し、人々は心の拠り所として絶対

的なものの存在を権威づけるために、鎮座まします『社』(やしろ)を建立し、信仰の対象として発展していったものと考えられる。

そして原始宗教は、過酷な自然環境の中で、何とか一族が、食糧・天敵とも問題なく、一日一日が無事過ごせるようにとの祈りから、自然に発展していったものと思われる。そしてついに『神の概念』をはっきりと認識し、信仰の中心とし、神は究極の実在となり、礼拝や祈りの対象へと進化していったのであろう。

また、古代の人々は、家族単位か、あるいは、いくつかの家族が寄り集まった小規模のグループで行動していたと考えられる。するとある時、その中の経験豊かな知恵あるものが年老いて、帰らぬ人となった。今までその長老の指図で、幾多の困難を乗り越えてきたのに、一群は途方にくれてしまう。

『何とか生き返って、再び我々を導いてほしい』と知恵を授けたまえ！ 勇気を授けたまえ！ と長老が眠るお墓に、跪(ひざまづ)いたに相違ない。

人類は、原人時代にすでに遺体を埋葬(*)する習慣が芽生え、新人になってからは、副葬品の種類や数も増し、お墓も時代とともに拡大していった。後の世では、特に知恵の有った者、軍功の有った者は、特別の社に祀られることとなった。

【*35万年前の原人が、人を埋葬した跡が発掘されている。】

然し軍功とは、考えてみるとおかしなことで、人を一人殺せば犯罪人だが、多くの人を殺せば、英雄だ・軍神だと社に祀られる。平和こそ第一と考えれば、戦争は正に巨悪であり、あつてはなら

ないことだ。それを、讃えるというのだから、人類の「性」(さが)というか、闘争本能むき出しの姿勢というか、醜い一面だと思ふ。

時代が進み、国家のようなものが形成されていくと、酋長とか大王などを祀る巨大な古墳や、ピラミッドが造営され、その前で、王位継承の儀式などが行われるようになったと考えられる。

さて、人類の三大革命は、①火の使用。②産業革命。③相対性原理の発見。と、もの本に書いてあったが、私に言わせると、この三件のほかに、『神の概念』を創出したことは、人類史上最も大きな出来事ではなかったか。

おそらくその時期は、火を用いて、食べ物を意図して調理し始めたといわれる40万年前と相前後する時期ではなかったかと思われる。なぜなら、人類の脳が、急速に発達(＊)するのは、火を用いて栄養改善が確保されてからである。人類の脳は、時間に正比例して拡大していったものではない。火を用いるようになってから、急速に拡大し始めたのである。

【＊現在の人類の脳容積は1400cc。人類の祖先が700万年前、大型類人猿と枝分かれした時点の脳容積は500cc足らず。およそ500万年間にわずか150ccしか増えていない(ある石斧は100万年も同じ姿で、全く変化をしていない)。それから160万年後(今から40万年前)の火の使用直前までに250cc増え、900ccとなる。しかし火の使用が始まり、20万年経って、ホモ・エレクトウス原人が、新人を生み出す頃は、1100ccとなり、その新人はわずか20万年間で脳が300ccも増え、現在に至る。

しかし余談だが、脳の大小で「知能」が決ま

るわけではない。1800ccの知的障害者もいたし、1921年度ノーベル文学賞受賞者のアナトール・フランスの脳は1000cc(原人並み)であつたという。

更に余談だが、(火で焼かれた獣骨は200万年ぐらい前のものが発見されているが、自然火災によるものか、人為的な加熱かの判別ができない。)意図した火の使用↓栄養改善↓脳容積拡大の一連の変化が、更に手や道具などを使う事により益々脳は発達し、こともあろうに、欲望の拡大へとつながつた。腕力・謀略でその目的を果たし、ついには好戦的な、凶暴な人類へと進んでいった。アウシュビッツや、ルワンダの大量虐殺はその典型的な例と言えよう。私はこのように、凶暴性に進化した人類の脳を「毒饅頭」と名づけている。

人類は、毒饅頭を脳天に頂いた「怪獣」である。脳の暴走をどうやって止めるか?…進化は逆戻りしない。無策でこのまま暴走を続けたら、必ず取り返しのできない破滅が待っている。老人の単なる杞憂ではない。今回の世界経済恐慌など、その走りであり、破滅の前兆ともいえる。温暖化や資源枯渇などを防げないのならば、こんな動物に地球のリーダーは任せられない…と神様が怒り、破滅の鉄槌を下されるに相違ない。人類に、もし智慧というものがあるのなら、早々にこの「怪獣」を飼ひ馴らす必要がある。】

このようにして原人は、食物や狩が実り豊かになりますよう！ 天敵から守られますよう！ 怪我や病気がないように！ と、いつも、なにかに祈り続けたに違いない。そして『神』は、いかなる者もそれを犯すことのできない、超自然で全知全能の「絶対者」であり、全人類の生きる規範と

考えられるようになった。その御前にひれ伏し、願望を成就すべく努力することを誓い、理性が支配する、より高度な社会へと発展する礎となつていったのであろう。

それが特に一神教では、多神教の、山の神・海の神・田んぼの神など普遍的なものではなく、神は唯一のものとなつた。

神は世界の創造者・あるいは万物の根源・自然の秩序を超越するもの・人の世のはかなさに比べ、永遠であり、全知全能の完全なるもの…と考えられるようになったのであろう。

しかし一方、世が進み、こんなにも滅私信仰・ひたすら祈り三昧で暮らしてきたのに、歌の文句じやないが『茶断ち塩断ち、お百度参り』で願をかけ、神様に血のじむような祈りをささげたのに、最愛の人を病で失う。家運は傾き、人には裏切られ、親戚にも見捨てられる。善良な市民こそ、清貧に追いやられる。

又一方では、一家の大黒柱が戦場に駆り出され、無念の戦死。そのため、友人の家族が離散した例を、私は見えてきた。神も仏もあるものかと、どれだけ運命を呪ったことか。そんな例は他にも沢山あつたはず。あの大東亜戦争とは、一体何であつたのか。毒饅頭の仕業だ。

片や、悪運強い者は、やることなすこと順風満帆。肩で風を切り、大手を振って歩いていく。『悪い奴ほどよく眠る』を地でいくような、何の努力をしたというのでもなく、暖衣飽食の限りを尽くす。

このような社会現象を見れば、誰でも、こんな不合理があつてよいものか。神など信じない……己の不運を嘆き、不平等を恨み、こうして無神論

者が出てくる。

* * * * *

私は物質世界こそ、究極の「実在」と信じている。人の心も、脳内での化学反応・電気反応の結果である。人を『愛しい』と思うためには、脳下垂体後葉から分泌される、オキシトシン（*）というホルモンが作用しなければ、愛情は湧いてこない。高次元の「愛や恋」を、物質支配と云われてはあまりにも味気ない話に聞こえるかもしれないが、生き物は、体内のこのような化学反応により、強固な愛情に裏打ちされ、夫婦のきずなを深め、協力して困難な子育てを完遂するように、仕組みられている。動物に子孫繁栄をもたらす基本的な原動力は、ホルモンとか、フェロモンなど化学物質のネットワークにより、作り出されたものである。

そういう観点からは、動物も人間も全く同じであり、人間は自然界から超越した、完成度の高い特別の存在などでは決してない。

【オキシトシンは「催乳ホルモン」として、1953年に発見された。わずか9個のペプチドからなる単純物質である。ところがこのホルモンには「抱擁ホルモン」「協調ホルモン」の別名があり、強い愛情（人間のセックス時のオーガズムは、両性とも、このホルモンの血中濃度が最大値になった時に到達する）を生み出し、確固たる協調性により、多大な犠牲を払ってでも、子育てをする原動力となる。】

人間とチンパンジーとのDNAの違いは、2%足らず。人種間のDNAの違いは0.02%以下である。人種間のDNAに差がないから、混血ができる。差が大きかったら、減数分裂した生殖細胞

（配偶子）は、たとえ融合したにしても、胚は育たない。雄ロバと雌馬の混血児を、騾馬（らば）といい、逆に雌ロバと雄馬の子を「けつてい」という。これらは、いずれも一代限りで、繁殖能力は持たない。

このように、以前にも書き重複するが、20万年前、現生人類は、東アフリカで、ホモ・エレクトウス原人から突然変異で、「新人」ホモ・サピエンスとして生まれた。その新人が、アフリカで気候変動等により、食料が少なくなると新天地を求め、7万年前、わずか150人ほどの集団で、アラビア半島へと脱出を試みた。現在の世界人口65億人は、すべてこの150人の子孫である。いわば、みな親戚のようなもの。

150人は、しばらくアラビア半島付近に留まり、1万人ほどに人口が増加し、世界各地に飛び立とうとしていた矢先、インドネシアの、トバ山が大噴火を起こした。この爆発は史上最大級で、6年間も塵灰が空を覆い、地上まで太陽の光が十分届かず、気温は10℃も下がり、夏でも雪が降り、氷河期に拍車をかける。折角増えだした我々の祖先1万人は、3千人ほどに減り、新人は滅亡の危機にさらされた。しかしこの新人には、かつての原人が次々滅亡していったのとは違い、大脳も大分進化していたので、幾多の困難を乗り越えるエネルギーがあった。

3千人の一部は、再びアフリカに逆戻りした仲間もいた。赤道直下で紫外線から身を守るため、益々メラニン色素を増やしていく。一方、アラビア半島から北を目指し、北欧の奥深くまで辿り着いた仲間は、紫外線が弱くなるため、メラニン色素をあまり必要とせず、肌の色はだんだん白くな

る。一方東進して、アフリカと北欧の中間緯度のアジアに進出したグループは、肌の色は中間色の黄色を帯びてくる。

このように人類は、その棲みついた場所により、肌の色が変わり、自然環境によって食性など生活様式が異なっていた。

勿論言葉や道具や、そして宗教も異なっていた。それぞれの集団にそれぞれの『神』があったのかもしれない。分派が、更にその分派を生み、夥しい数の言葉や習慣や神が生まれたに相違ない。おそらく一つの分派から1000年もたてば、言葉も習慣も大分変わり、共通項はかなり少なくなっていたのであろう。

そう考えてくると、身近ではテリトリーが重複したりすると、食糧の奪い合いとか、言葉が通じないとか、諸々の習慣が違うとかで、近隣同士が、いがみ合う。

そして遠く離れた場所同士では、肌の色が違うとか、宗教が違うとか、山族や海賊の子孫だとか言って罵り合い、人種差別をし、大きな争いに発展することもあったろう。元をたざせば、祖先は、わずか150人の仲間同士であったはずなのに。科学的に人類史を顧みれば差別など生み出す根拠はどこにもない。差別などナンセンス極まりない話である。

さて私は、全くの無神論者というわけではない。荘厳な社の前に佇めば、自ずと頭（こころ）を垂れ賽銭をあげ、礼拝をする。祖先のお墓には、古代よりのDNAをつなぎ、育ててくれた祖先に感謝の念をこめ、墓参する。想いはアフリカまで及び、「遙かなる旅路」の労苦に感謝の念を捧げる。また毎年元旦には、人並みに初詣をし、縁起物

を買い求め、神棚に飾り、家族の安寧を祈る。

唯物論的思考に支配されている私といえども、古代より、多くの人々により醸成された『神の概念』を、全く無視するわけではない。なぜなら、太古の祖先から受け継いだこの血液の中に、飢餓に耐えるための生理機能や、病原微生物に侵襲された時の防衛機能など、それなりに、しっかりとした遺伝を受けて、今日の自分があるわけなのだから。どの時代のどのような祖先が、生存に適するような遺伝子変換をし、子孫繁栄に役だったか知らないが、これも見方を変えれば、神のお導きと言えなくもない。私もある年齢に達すれば、しゃかりきの角が取れ、多少は、丸みを帯びてきた。したがって、諸々の宗教行事を否定するものでもないし、神とか宗教が、社会を発展させる上で、重要な役割を担った事も認める。

ただ一神教原理主義者のように、自分達の神だけが唯一のもので、他は一切認めない……という気持ちには、到底なれない。

【私が現役時代、あるイスラム教国の獣医師を、国際協力事業として、一年間、国から頼まれ、技術指導したことがあった。その際、彼が私に言った言葉が忘れられない。『日本には神社仏閣は沢山あるようだが、国民の宗教心はそれほど厚いようには見えない。強い宗教で拘束せずに、国家が一つにまとめられるのが、不思議でならない。』言われてみれば確かにそう言える。

世界の多くの国は、何か強い宗教で国民がしっかりとまとめられ、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教など、ゆるぎなき団結で確固たる国家を形成している。勿論異端者などは、まずその国で生存は難しかろう。

さて、彼の国イスラム教では、豚肉を食べることを固く禁じている。そのわけについて、ある人はこう解説する。アラブ地方で発生したイスラム教は、遊牧民にその基礎をおく。遊牧の民の基本は、季節の変動・嵐・天敵・他の仲間の動き……などを読み切り、リーダーは集団を安全に、より効率的に群れの移動を導かなければならない。定住しない彼らにとって、安全な移動はリーダーの最重要課題である。遊牧民の移動は、人や物はどうにでもなるが、連れて歩く家畜は、キチンと統制がとれていなければならぬ。牛や駱駝や羊は訓練され、人の言うことをよく聞くが、家畜としては、とても有用な「豚」だけは、どのように訓練しようが、人の言うことを聞かない。豚は猪突猛進する猪の子孫である。豚はそれに携わった人なら、誰でもよく知っているが、ある方向にまとめ移動させるなど、至難の業である。勝手気ままな方へ突っ走る。トン走の名人だ。豚とともに群れを統率し、移動することなど、まずできない。

そこで、イスラム教の究極のリーダー・預言者ムハンマド（＝マホメット・唯一神アッラーの使徒）は考えた。ムスリム（イスラム教徒）は神から授かったコーランに絶対に従わなければならない。群れの合理的な移動には、豚を除外しなければ統一できない。そこで『ムスリムは豚を食べるはいけない』コーランにきちんとそう書いてある……と彼は唱え、全てのコーランを、そう書き変え、国民を統一した。厄介な豚の問題を解決し、マホメットはアッラーの使徒として民族をまとめ、イスラム王国を築き上げていった。（現在イスラム教徒13億人・キリスト教徒17億人・ユダヤ教徒1280万人。）

さて、アメリカの新大統領は、聖書に手を載せ、国民や世界のために努力することを誓った。初心忘れるべからず。世界平和のために、一命を賭しても、粉骨砕身努力してほしい。

以前の各大統領も、多分同じことをしたと思うが、非人道的な行為が何度も繰り返されてきた。原爆投下や枯葉作戦など、その最たるもの。つい先日のクラスター爆弾禁止条約に、最大保有国のアメリカがまず反対。そして根拠不十分のまま、国際世論を無視したイラク攻撃で、一国を壊滅させた暴挙などなど。一体、人類は何のために『神の概念』を発明したのか……。

さて我々は、個人としても毎年、初詣にあたり、心も新たに、怠け心を廃し、努力を誓い、一家をお守りくださいと祈願する。

しかし私など、その清新な心は三日と長続きはしない。何のための初詣か。商業主義に踊らされ……とは承知しつつも、やはり験を担ぐ。『今年は省略！』と言うわけにはいかない。善良な市民のつもりが、すぐ誓いを破り、まあええか……とすぐ妥協し、怠惰に陥る。今年こそ、あれとこれを完成したい……などは、まず絵にかいた餅。

それが我々凡人のことなら、天下国家に殆ど影響はない。問題なのは巨大な組織のドンや国家の宰相が、三日坊主や投げ遣りでは真に困る。

逆に執念深く、他への迷惑など、どこ吹く風。神に誓って初志貫徹とばかりに、強欲を貫き通す。世界各地に、このような、ならず者国家や独裁者は数多（あまた）いる。

『神様、さまよえるこの日本を、お導きください。そして世界が、未永く平和でありますよう、お守りください！』

上の娘の所から下の娘の子を連れて帰るときだった。揺れるバスはすっかり暗に包まれて灯が見える。その灯もとどまることなくとんでいく。会話も数少なくなっていた。

「おばあちゃん。おばあちゃんのお母さんはいるの」

「いないよ」

「どうして」

「年をとって亡くなったよ」

「うーん」

突然言いだした話がとぎれた。

「いなくなっちゃったって死んじゃったこと。どこへ行っちゃったの」

「昔の昔の人たちがいる所へいったよ」

「じゃ、おばあちゃんも死んだらそこへ行くの」

「そうだよ」

「じゃいいね。おばあちゃんのお母さんに合えね」

「そうよ」

そんな話をしながら赤や青や橙、そして黄の灯りをみていた。ここが異国であることを忘れてしまふ思いだ。

この子と六年間一緒にいた訳ではない。年に一度合う程度。そんな中でこの子はいろいろなことを感じ、思い、日本語を通して表現できるようになっている。

私は十の単語すら覚えきれないでいる。でもこの国に来て生活を共にしている中で心をかよわすことの出来る人もいた。どの位の人に合ったろう。ただすれ違った人も沢山いる。

もう二度と合うこともないだろうし、合う必要もないかもしれないが何か気になる人々だ。生活の基盤だった故郷の人たちでさえ名も知らず顔合わせすることもなく過ぎ去ってきた人も多い。

世界六十億ともいわれる人たちとの係わりなどあり得ない中で心に残る人となったのは、「ご縁」があったということだろうかと思うと急になつてしなくなってきた。どうしただろうあの人達。

七年前、異国で産月をむかえる娘を案じ行つた先のアパートは、地下一階だった。陽をみることもない部屋。窓はしめたまま、地上に出入る所からほこりが入ってこないかと、何か暗いおもいだつたが若い二人は産れる子を待つて楽しそうだった。

花でも飾ってやろうと出口に鉢物を置いた。そこを通りかかった白髪の女の、いいなー、とばかり指をさし首を振ってくれた。

あのアパートも今いるところからは程遠い。あれから尋ねたこともない。どうしているだろう。郵便局の女の事務員。親切だった。父に似ていた局長さんはもう定年になつただろうか。

買物に出ると町の道々には農村から出て来た人が店を出す。玉ねぎ売り場の老人夫婦の所で玉ねぎを買った。日本語で話した時、ご主人が「日本語出来るよ」と言つて話してくれた。学校の時、日本の先生ばかりだったという。「ちようちよ、うたえるよ」といつてうたつてくれた。

次の年にはおじいさんはいなかった。おばあさんと友だちが店にすわっていた。

「わたしらは川むこうに住んでいる。じいさんは医者がよいで店にはこないよ」

あの店は続いているだろうか。おじいさんは元氣になつたろうか。ちようちよの歌のほかには学校の話など聞きたかつたね。

夜娘と牛乳配達を手伝つたことがある。娘の言葉がまだ充分でなかつたらしく、半分ばかりにされたらしく牛乳代を何やかやと理由をつけて支払つてくれなかつたが、娘のだんなが行つてもらつてきたと聞いた。その人もなつかしい人。

5の付く日、10の付く日、そして土曜に各地域で市がたつ、規模は小さきままだがとても人々がいきいきしている。ある市で親子のあめ屋に合つた。テープから快活なメロディーが流れていた。息子はあめ細工をする。のぼしたり切つたり、はさみを使ってとても手ぎわがよい。父親は肩から太鼓をさげ、たたきながら踊る。みていた私と孫は手足でリズムをとつていた。父親の方が私の手をとつておどろろという。躊躇することなく踊つた。孫も踊つた。まわりの人（老人が多かつた）も仲間に入つてしばらく踊つた。楽しい時間だった。あの親子はどこをまわっているのか。市がたつたび出かけていったがもう合うこともなかつた。あの太鼓の音は、あの国のどの辺りをまわっているのだろうか。

娘と孫二人と私は、バスが停まつたので降りようとした。運転士が「はやくしろ」とどなる。後ろの方にいた老婆が二、三人「そうだ、そうだ。ぐずぐずすんな」とわたしにあびせる。くやしがつた。幼い子をつれているのにとつたが、だまつておいた。なんだったんだらう。あの運転士も毎日おいてられるようにほこりをたてて走っているのだろうか。

去年も続けて作っていたさつまいも畑、今年みたらゲームする場所になっていた。あの男の人は外の畑を耕しているのかな。もう農仕事はやめたのだろうか。

日本人に合った。異国で日本人に合うと、すぐ隣のおばさんかと思え、親しく話した。神奈川の人で男の子をつれていた。また福島の若い娘たちはとても明るく、「日本に帰って、どこかで合えるかもしれないね」と別れた。本当に合えるだろうか。

アパートは、コの字型に三棟ある。その出入口には守衛さんの事務所、飲食店、ピアノ教室、店が二つある。小さい方の店が感じがいいので、ちよつとした買物にいった。二千ウオンの牛乳を買った。ある時「牛乳はこれも、これもあるよ」と二、三種みせてくれた。中の一八〇〇ウオンのをといってもらってみた。何気なく買っていたが娘も「これがいいよ」と店の主人のすすめてくれたのをさしていた。

今年行ってみると、もう戸締めになっていた。言葉の出来ない私に親切に教えてくれた人だったのに、と残念に思った。生活には困っていないのかな、とも思ってみた。

その他にもテープ売りの男の人、市場で言葉が通じず怒り出した姉妹風のおばさん達。たくましく生きてきたのだろうか。今も元気かな。

高い山の寺へ登った時だった。私をおいてどんどん登って行く孫たちを見て「ピョンピョン元気で子リスのようだね」と声をかけて降りていった人。多くの人との出会いがあった。あの人たちと

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)

(1000円)

菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」(2) (定価: 500円)

打田昇三: ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・)

(二冊組: 1000円)

菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価: 500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を詠いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)

白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組: 800円)

近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組: 800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館: 0299-46-2457

・いしおか補聴器: 0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

二度と合うこともないだろうか。合えれば合いたい。でも合えなくてもいい。あの人たちから受けた優しさや暖かさ、楽しさばかりでなく叱られたことも含めてこれからの自分の力にしていこう。自分では青春まったただ中にいるつもりだ。ペ・ヨンジュンのポスターを娘からもらっていい気持ち土産にしてみんなにも届けようと荷づくりしてい

る後から「おばあちゃん」「おばあちゃん」とあびせられる言葉。「よくばりばあさん」「いじわるばあさん」の話をしてやりながら、ばあちゃんになりきっていった毎日の自分。それが現実なのだ。これから先の時間の中ですべて貯えたもの、受けたものを生きていく力にしていこう。二度と合えない人々、ありがとう。

世界四大文明のうちで最古と言われるのがエジプト文明とメソポタミア文明である。エジプトは最も早く王国を形成しながら基本的にはナイル河流域に終始したようで、第三十一王朝まで続いたものの各王朝間に連続性は無く、紀元前五百年頃に滅びる。有名なクレオパトラはエジプトに住民票はあつたが全くエジプト人とは関係の無いプトレマイオス王朝（ギリシア系）の娘である。

メソポタミア文明は各地の文明に影響を与えたとされるが、王国などの形成はエジプト文明よりも五百年ほど遅れたという。エジプトではナイル河流域を支配すれば権力を握れた。メソポタミアはティグリス、ユーフラテス両河の治水が難事業で巨大な権力が出来難かつたと考えられている。

エジプトが先王朝時代の頃、メソポタミアではウバイド期と言つて小さな農村集落から神殿などを持つ町が出来た。灌漑農耕が進んだことが推測されている。それでも紀元前二千四百年頃にはアツカド王朝のサルゴン王（猿ではない）が、当時の異国を征服して人類史上最初とされる帝国を樹立した。やつと生まれた王朝は二百年で消えた。

アツカド王朝の後にバビロン、ラガシュ、マリなどの王国が出来て「ハンムラビ法典」が創られたりしたが、都市国家同士の潰し合いになりアッシリアがほぼオリエント全域を支配する帝国として登場したのが紀元前七百年頃とされている。

紀元前六百年頃になるとバビロニアの南部ティグリス河とユーフラテス河が合流する辺りからペルシア湾岸にかけて小規模な勢力を持つていたカルデア人（西セム系とも言われるが正体不明）の

「海の国」がウルクやバビロンに進出して来てアッシリアを追い詰め、新バビロニア帝国を興して「バベルの塔の再建」や、ユダヤ人には忘れられない「バビロン捕囚」などを仕出かすのだが百年ほどで強敵に滅ぼされてしまう。

その強敵というのが紀元前五百年頃からイラン高原に興り、世界史上最初の統一帝国に発展したアケメネス王朝・ペルシア帝国である。この王朝は先史時代から南下してきたインドヨーロッパ語族系アリア人（イラン民族）の一派で部族長のアケメネス（ハカーマニシュ）を始祖とする。

「歴史学の父」と言われた古代ギリシアの歴史家ヘロドトスは紀元前四百年代に「歴史（上・中・下の三巻）」を著わしてペルシア帝国の興亡を詳細に記述している。（日本語訳は岩波文庫がある）

アリア人の南下は整然と行われた訳では無く五百年ぐらいかけて波状的に繰り返されたらしいから、花火見物の場所取りと同じで早く来た者が良い場所に定着できる。イランはカスピ海南岸とペルシア湾岸に少し平地はあるが険しい山脈を背負っているから国土の中心に適さない。あとは砂漠と高原なので、高原低地で古代交易ルートに近い場所が一等地になる。現在の首都テヘランも、そういう場所であり筑波山頂より標高は高い。

最初にイラン高原へ来た部族はテヘランから東へ300kmほど離れたエクバターナ（ハマダン）に定着し、王制部族社会を発展させてメディア王国を築いた。ティグリス河中流域のアッシュールに興ったアッシリアが首都を上流のニネベに移し敵を串刺しや皮剥ぎにするなど「残虐な軍隊」を誇示して周辺諸民族を服従させていた頃である。生存のためアッシリアに服属していたメディア

王国であるが、歴代の王が少しずつ反抗して自国の護りを固め反アッシリアの姿勢を貫いた。王城は「七色の城壁で七重に護られていた」という伝説があり、近年に発掘が行われたけれども証拠は出てこなかった。アッシリアが「残虐」を看板に脅して近隣諸国を制圧していたのに対抗してメディアは架空の「七重の城壁」で牽制したらしい。そのうちにメディアのほうが強くなり、アッシリアは首都のニネベなどを明け渡すまでになった。

イラン高原へ来るのが遅くて、つまり場所取り競争に負けてメディア王国に服属していたのが同じ民族でファールス地方に定着した部族である。ファールスはパルサとかペルシス、ペルシアなどとも呼ばれるイラン高原北西部、ペルシア湾に沿って連なるザクロ山脈（ザクロの原産地）の麓で、現在はシラーズという都市が中心地である。

イランと日本の関係に着目された松本清張先生は現地へ何度も行かれ、ペルシア部族がメディア王国から独立する過程の遺跡を確認されている。それにあやかつてイラン・イラク戦争の直後に私も行つてみた。日本では最初、世界では二番目のお客だと煽てられたが、持病持ち中古バスや無灯火の飛行機、怪しい羊肉、軍と警察の厳しい検問などで歓迎され、シラーズでは僅か四十五分のフライトなのに真夜中四時間も空港に留められた。

「ふるさと“風”」第二十号の「欠片（かけら）有り」で書いたように、メディアの王様アステュアゲスが奇妙な夢を見た。王女のマンダネが大規模？な寝小便をして町が水浸しになる夢である。どこの国にも他人の人生に口を挟む無責任な宗教や古いはあるもので、夢の意味を問われた占い師が「どこか遠くへ離すように……」と進言したため

に王女は僻地のペルシア族に嫁がされた。

権力を握る者は、我が子や孫にでも自分の地位が奪われる心配をするものらしく、パリの飛行場にも名前を残すドゴール將軍が大統領として頑張っていた頃に、遊びに来ていた孫に「大きくなったら、どんな人間になりたいか？」と質問をした。孫は胸を張って「僕も大統領になる」と叫んだ。ドゴールは途端に不機嫌になって「…大統領は一人でいいんだ！」と言ったらしい。

アステュアゲス王もドゴール將軍と同じ発想から馬鹿占いに引つ掛かって、王女を僻地へと追い払ったのだが、その娘が懐妊したと聞いて今度は王女の下半身が植物になってアジアに生い茂る夢を見たのである。聞かれた占い師は、どうせ自分のことでは無いから「王の孫が男子ならば殺す」ように占った。王宮に呼ばれた王女は元氣な男の子を出産した。この赤ん坊の命は有難い占いのお蔭で城外に放り出され消される運命にあった。

根拠を「ヘロドトスの『歴史』」に置く史書が伝える内容は残虐極まりない驚愕の事件なので、私は「ふるさと『風』」第二十号では「家臣が赤ん坊を救出したこと」だけにしておいたのだが：

正直に書くと、メディアア王・アステュアゲスから「孫を殺せよ！」と命じられたのはハルパゴスと言う忠臣である。王に逆らうことは出来ないから取り敢えず赤ん坊を抱いて城を出た。世の中はうまく出来ているもので、その頃、自分の使用人（牛飼）夫婦が赤ん坊を死産した。ハルパゴスは元氣に泣いている男の子と嬰兒の死体とを交換して貰い、王の検査官に見せてから王様に報告した。牛飼の子の死体は丁重に葬られた。

後に「キュロス」と名付けられる王の子は牛飼

いの子として育てられた。出生の秘密は漏れなかったのだが、やはり王の血筋は争えず、十歳の時に子供たちと「王様ごっこ」をして遊んだ時にキュロス君が王様役に当った。家来役になった子供の一人は王の重臣の坊ちゃん、普段から威張ることしかしらないから「王様ごっこ」でも言うことを聞かない。キュロス君は王に従わない罰として他の家来役の子と一緒にこの坊ちゃんを叩いた。

子供に泣きつかれた重臣は、子供の喧嘩に介入して、このことを本物の王様に訴えた。「牛飼の子が名士の坊ちゃんを叩いた」ことは王侯貴族社会の一大事件になる。王様も自分の権威を傷付けられたものと解釈して牛飼い父子を呼びつけた。

呼ばれた牛飼いは震えていたが、子供のほうは毅然とした態度で王様の尋問に反論して言った。

「王様、僕のしたことは間違っています。遊びと言っても、僕は選ばれて王様を命じられたのです。それは僕が一番、王様に相応しいと皆が認めたからです。叩かれた子は王の命令に従わなかった理由で罰を受けたのです。私のしたことが間違っていましたと言えたら私も罰を受けませんが…」

「アステュアゲス」——これは本物の王である——は如何にも王らしい牛飼いの子の顔が自分に似ていることに気付き愕然とした。急いで牛飼いの親子を離し、父親に少年のことを厳しく尋問した。

「私の子です！」と主張し続けていた牛飼いも拷問を受けそうになると真実を白状してしまった。こうして、王の重臣ハルパゴスが王から「殺せ」と命じられた嬰兒を救い、死産した牛飼いの子と交換した秘密がバレてしまったのである。

牛飼い父子は怒られなかったのだが、ハルパゴスは事情を知らないままで王の呼び出しを受け、

急いで城にやってきた。王はさり気なく聞いた。

「…ハルパゴスよ…十年前にわしは娘の生んだ子をお前に預けて始末させたのだが…あの時にはどのように処置をしたのかな？」

「それはもう…私めは王の仰せられたとおりに致すように、この牛飼いに命じまして、この者も人の気配の無い山の中にお子を捨てて、お子が息を引き取るまで傍に居たことは多くの者が確認を致しております。お子はお亡くなりになりましたので、私も一同が丁重に葬りました…」

アステュアゲスは怒った様子を見せずに、牛飼いが白状したことをハルパゴスに伝えて言った。

「…わしも、あの子に酷い仕打ちをしたことを悔いておつたし、娘からも恨まれて困っていた…このような目出度い結果になったので、神様に子供を救って貰ったお礼のお祭りをしたい。取り敢えず、お前の子を、あの子の相手に城へ寄こしてくれ。お前も後で食事会に出席するように…」

秘密露見に驚いたハルパゴスも、王の言葉信じ十三歳になる一人息子に「王の言いつけに従うように」言い聞かせて城へ向かわせた。その子が来ると、アステュアゲスは容赦なくこれを殺害して頭と手足を切りバラバラにしまった。

食事会には王の取り巻きが参加した。その者たちには羊の肉が皿に山盛に出されたが、ハルパゴスの食卓に出されたのは切り刻まれた息子の身体の一部を調理したものであった。何も知らないハルパゴスが皿の肉を口にしたのを見て、残酷な王は「料理はどうか？」と聞いた。

ハルパゴスが「結構なお料理でした」と答えると王の側近たちが覆いの掛つた籠を担いできた。籠はハルパゴスの前に置かれ、側近たちは「お好

きなどころをお召し上がりください」と言つて退席した。ハルパゴスが覆いをとつてみると、それは惨殺された我が子の変わり果てた姿だった。

王の意図を察知したハルパゴスは驚かずにいたが王は執拗に「お前が食べたのは、どんな獣の肉か分かるか？」と聞く。「分りました」と答えたハルパゴスは、動揺した態度も見せず、さらに「王のなさることは、どのようなことでも不服はございません」と言い、籠に入れられた息子の遺体を貰い下げて家に帰り涙ながらに埋葬した。

牛飼いの子ではなくなつた少年は城に留め置かれた。その間にアステュアゲス王は例のインチキ占い師たちを呼んで「お前たちが占いをして捨てるように言つた子が、もし生きていたならばどうなるのか？」と質問した。

占い師たちは「…あの時のお子が生きて居られたら、王になられたことでしょうか」と答えた。

「…それが生きておるぞ！それも誠に王らしく子供とは言えぬ立派な様子である。これをお前たちはどう思うか？わしはあの子を恐れはせぬが：後々にこの国にとって面倒があつても困る：良く考えてわしの家系に一番良い手立てを考えよ：」

アステュアゲス王の気持に、王位を脅かされる不安と、自分の血筋に繋がる立派な子が出現した嬉しさがあると感じとつた占い師たちは、最も適当と思われる答えを準備した。

「占いによりましても、生きておられたお子がこの国の王になることはございません。アステュアゲス王の治世に揺るぎは御在りませんが、そのお子も生き残つた強運をお持ちなので、ここは父母のいるペルシアで暮らさせるのが最善の策と考へます。王女様もお喜びなさるでしょうし、ペル

シアの部族たちに立派な後継ぎを与えても、わがメディア王国には何の影響も無いことです：」

こうしてキュロス少年は牛飼いの子から一夜にして、辺境ながらペルシア地方を支配する部族長の子となつて暮らすことになった。この時に少年は自分を育ててくれた牛飼いの女房（キュノ）のことを忘れず、ペルシアに行つてからも折に触れてキュノの噂をしていた。ヘロドトスは、そのことから「…ペルシア帝国の始祖キュロス大王は山中で牝犬に育てられた」という一般に広まっている英雄伝説が作られたのだと言っている。

二度の死地を脱して父母の許に送られ、アケメネス族の長であるカンビュセス王のもとで成人したキュロスは、メディア王国に服属してはいたが農耕民や遊牧民に分かれるペルシア人の興望を担う若者に成長し父王の跡を継いでキュロス二世としてペルシアの王となつた。一方、我が子をアステュアゲス王に惨殺されたメディアの重臣ハルパゴスは心中密かに期すことはあつたのだが表面上はあくまでも忠実な臣として王に仕えていた。

或る日、そのハルパゴスからペルシア王キュロス二世の許に、狩猟で得た一羽の兎が獲物のおすそわけに送られてきた。使いの者はキュロスに「誰も居らぬ時に、ご自身で兎を捌いて下さいませよう、との主からの伝言です」と言つた。兎の腹には毛で隠れた傷があり、そこを開いてみるとハルパゴスからの手紙が入つていた。

手紙には「…幼少年時代に貴方を酷い目に遭わせたアステュアゲス王に復讐するため、メディア王国に反逆する決意をしてください。その準備として私はメディア国の重臣たちに謀反を勧めております」と書いてあつた。

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

- 4月18日 國松竜次 ギターリサイタル
- 5月5日 マヌエル・カーノ コレクションコンサート
- 6月28日 高橋竹童 津軽三味線のひびき
- 7月12日 大萩康司 ギターリサイタル
- 7月26日 大島 直 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
0299 - 46 - 2457
Fax 0299 - 46 - 2628

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・
蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)
看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

キュロスはペルシアの部族長を集めて、一日目は朝からキツイ作業を命じ、二日目には入浴を済ませて来るように命じた。風呂上がりでサツパリした人々の目の前に御馳走と酒が用意された。

宴会の後で、キュロスは「昨日の作業と今日の会食ではどちらが良いか？」と質問した。誰もが「今日の方が良い」と答えたので、キュロスは身を乗り出し「メディアの支配から脱して良い暮らしをしよう！」と反乱を呼び掛けた。多くの部族からなるペルシアは、こうしてキュロス王の許に団結して辺境の地に旗を立てることになった。

「ペルシア謀反」の報が届くと「やはり！」と「まさか！」の思いが交錯したアステュアゲス王は使者を寄こしてキュロスにメディアへ戻ることを勧めたがキュロスは拒否した。インチキ占い師はその場で丁寧に串刺しにされたが、逆上した王は自分の過去の所業を忘れ、こともあるうに謀反の火元であるハルパゴスをキュロス征討の司令官に任命したから、メディア王国は税務署へ脱税の相談に行ったような結果になってしまった。

メディア軍は南東に向かい、ペルシア軍は北西に進んで両軍が激突するのが戦争の基本であるがメディア軍は総司令官のハルパゴス以下、主要な軍人がペルシアに内通しているから、戦闘らしい戦闘も行われないままに第一次会戦でメディアの敗北となり出陣した兵力に比べると、ごく少ない敗残兵だけが首都に逃げ帰ってきた。

アステュアゲス王は後期高齢者から幼稚園児まで町に居た者を狩り集めて武装させ、自ら出陣したが結果は言わなくても分かる。捕虜になった国王はハルパゴスに罵られたが、命だけはキュロスに救われ屈辱の生涯を送ったと伝えられる。

母の国であり自分が牛飼いの子として育ったメディアの国王として虹色に輝く(予定の)エクバターナ城に入城したキュロスは、紀元前の五五〇年頃から五三〇年代にかけて周辺諸国を制圧しペルシア王国を人類史上初の世界帝国にする。

古来、日本でも外国でも既存民族に対する征服者は、どのように釈明しようとも「歓迎されない存在」であり「悪者」でしかない。貧困か裕福かは別にして穏やかに暮らしていたところへ土足で踏み込んで来るのだから誉められる道理が無い。

近頃は自分が目立ちたい野心から「日本の大陸侵攻は正当だった」などと言う奴がいるがトンデモナイことである。日本は、縄文人が居た土地へ弥生人が攻めてきて国家を建てたらしいから「勝者の論理」で歴史が創られ、敗者の悲劇は闇に葬られる癖がついている。抑圧された者の立場から見なければ真の歴史は分からない。

偉そうなことを言っただけで申し訳ないが、実はペルシア王国の創始者キュロス大王は「征服者」の筈なのに例外的に評判が良い。これでは話の展開上都合が悪いので少し邪魔を試みただけである。

片田舎の族長からペルシア帝国の大王となったキュロス二世は、祖父ながら自分を二度も殺そうとした非情なアステュアゲスの命を助けた。それどころか、ある史書によれば「アスチュアゲスの娘、つまり母親であるマンダネの妹を妻にした」とある。尤もペルシア民族は徹底した部族社会が母体なので血族結婚が普通だったようである。

排他的と思われるユダヤ人でさえも「旧約聖書」でキュロス二世をメシア(救世主)と讃えているとか：ユダヤ人は新バビロニアの統治下に小王国ながら独立していた。ところが王たちが反乱を繰

り返すので「新バビロニア帝国」のネブカドネザルという睡眠不足のような名前の王様が眼を覚まして国民の大多数を異国へ連れ去っていた。紀元前五三八年、新バビロニアを滅ぼしたキュロス大王はユダヤ人を元の地に返してやったのである。

歴史的に「金持ち」のイメージで名を挙げられるのがリュディア王国の王様クロイソスである。この人はキュロス大王に殺されたが、命を助けられて顧問のような存在になった。

リュディアは西暦五百年代まで少しの間、トルコ北西部にあった小国で、残虐を売り物にしたアッシリアが滅亡した後に来たらしい。世界史によつては無視されていて記録に見当たらない。

尤もその頃は世界の国々といっても中国は殷と周に続く春秋時代、エジプトに王国があり、ギリシアは都市国家同士が争い、ヘブライ人はユダヤ教で偉そうなことを言っても民族同士で潰し合いをして共倒れ、日本列島は神様が雲の上から縄文人の暮らしを羨ましそうに見ていた時代である。

リュディア国の首都は「サルデイス」に置かれていた。エーゲ海に面したトルコのイズミールから五十kmほど入った場所である。沿岸部にはトロイ、エフェソス、ベルガマなど古代ギリシアの有名な遺跡が密集している。ギリシア本土は土地が痩せていて農耕に適さないからドーリア人、アイオリス人、イオニア人などギリシア系民族が早くから対岸に渡り植民都市を形成していた。

リュディアは、内陸部に定着して沿岸部の殖民都市を支配する形で繁栄してきた。何よりも国王のクロイソスがギリシア好きで好意的であったから支配下にあつてもギリシア人には良い条件で商売(小売はせず、主に交易)が出来た。黒海方面

には幾つかの遊牧騎馬民族が居り、強盗団として
忘れた頃に襲って来たようなので、リュディアは
用心棒のような仕事をしていたのかも知れない。

ヘロドトスは、リュディアの王家をギリシア系
民族で神話に出てくる不死の神・ヘラクレスの子
孫だとしている。ただし王家は途中から家臣に乗
っ取られたようで、クロイソスの家柄は本来の王
家ではない。その辺のところはどうでも良いこと
なのだが、歴史の父が書き遺しているので、少し
エロチックな話になるが触れておく。

ヘラクレスから二十何代目とかの王様はカンダ
ウレスと言い王妃には絶世の美人を娶っていた。
王は王妃を愛していたが、その美貌を誰彼となく
自慢したくしようがない。そうかと言って一般
公開する訳にもいかず、側近のギュゲスには毎日
のように「王妃の美貌」を聞かせていた。

ギュゲスのほうは、宮殿の奥深くにいる王妃を
じつくりと見る機会も無く、幾ら美人でも自分
は関係が無いから適当な返事しかできない。その
辺りの空気を察したガンダウレス王は、或る日、
ギュゲスを近くに呼びつけて言った。

「ギュゲス：そのほうは、わしが妃の容姿美貌
について話すことを信じてはいないようだな：」

「：いえいえ：決して左様なことは御座いませ
ん：それはそれはお美しく気高いお方であられる
ことは十分に承知致しております：」

「：まあ、言葉では何とでも言えよう：お前は
妃の真の姿を近くで見たことが無いから適当なこ
としか言えぬので有ろう：宜しい、お前に妃が着
物を脱いだ姿を見せてやろう：その美しさを自分
の眼で確かめるがよい：」

ギュゲスは仰天して断った。

「王様、どうかご勘弁ください。女性が肌を見
せることは最大の恥じらいとなるものです。臣下
の者が王妃様の裸身を見るなど有ってはならない
ことです。王妃様が世界最高の美女であられるこ
とは、私奴も十分に分かりました：」

ガンダウレス王はギュゲスの心配を打消すよう
に「何も恐れることは無く、何の罪にも問わぬ」
と断言して、王妃には絶対に気付かれず宮殿内部
に忍ばせる手順を示し、寝室入口で王妃が着衣を
脱いで王の寝台に来る様子を説明した。それでも
断るギュゲスに王は命令で服従させてしまった。

ガンダウレス王は約束どおりにギュゲスを宮殿
の奥に伴い王の寝室の扉の陰に潜ませた。やがて
王妃が部屋の中に入ってきて、王が言ったとおりに
一枚ずつ着衣を脱いで椅子の上にかけて。生ま
れたままの姿になった世界一の美女？は、そのま
ま王の寝台に向かい、扉の陰から禁断の拜謁を行
わざるを得なかったギュゲスは、王妃が背を向け
た僅かの隙に宮殿から脱出したのである。

翌朝、ギュゲスの許に珍しく王妃からの使いが
来て「すぐ後宮へ出頭せよ：」と言われた。昨夜
の秘密が漏れる筈はないと考えていたギュゲスは
王様から預かった褒美でも貰えるのかと、軽い気
持ちでやってきた。王妃の周りには武装した数人
の軍人が怖い顔をして立っていた。

「これ、ギュゲスよ！」素っ裸で王様の寝台に
入った時とは全く違う顔で王妃が言った。

「そのほうは今、二つの選択肢を持っている。
一つはこの場で命を断たれること：もう一つは、
ガンダウレス王を殺害して私の夫となり、この国
を治めること：どちらか自分で決めたほうを選ぶ
がよい。理由は分かっているであろう：ガンダウ

レスの言うがままに、見てはならぬものを見てし
まったギュゲスか、企みをしたガンダウレスか、
どちらかが死なねばならぬ：早く決めよ！」

一瞬にして崖っぷちに立たされたようなギュゲ
スは両方とも遠慮することを嘆願したが、世界一
の裸女の拝観料は高くついた。最終的にギュゲス
は自分に苦痛の無いほうを選び、サービスとして
国王を殺害する手段を教えて貰うことにした。

王妃自慢の度が過ぎたガンダウレス王は、自分
がギュゲスを手引きして寝室に入れた方法で簡単
に暗殺され、リュディア国王の系統が変わった。

自分でも幸運か不運か分からないままに王位に
就かされたギュゲスは、美しく怖い王妃の指導の
もとに三十八年間も国王で居られた。ギュゲスか
ら五代目の王が金持ちのクロイソス王である。

クロイソス王は西欧で最初に貨幣を鑄造した人
物として「金色燦たるクロイソス」と呼ばれ世界
に知られている。東洋では中国の貨幣が紀元前一
千年以上昔からあったらしく、古いことは古いの
だが素材が貝殻や銅である。クロイソス王のものは
金と銀の自然合金（エレクトロン）で鑄造され
原材料は国内産だと言うから凄い。

「ふるさと“風”」の第三十号冒頭で主宰の白
井啓治さんが書いているように、現代の国々は何
の価値も無い紙幣や証券などに権威を付けて一喜
一憂しているから恐ろしい。「金ピカ」もどうかと
思うが紙よりは見た目が頼りになる。

そのクロイソス王はペルシアにキュロスという
王様が出現したことを聞き国防に多額の予算を注
ぎ込んで世界最大規模の騎兵隊を創設した。騎兵
というのは単に馬だけ揃えれば良いというもの
は無い。馬具、飼育、調教、装備、訓練などに金

がかかる。馬でも馬鹿な馬は役に立たない。

紀元前五四五年、予測通りにペルシアのキュロス大王が軍勢を率いて西に進んできた。尤もキュロス大王は先ずリュディアに対してペルシア帝国の宗主権を認め臣従国となるように言ってきた。

当時のリュディアはエジプトや新バビロニアと交際しており、さらにギリシア都市国家の中でも戦争好きで有名な「スパルタ」と友好関係を結んでいたからイザという時には救援が頼める。

それに加えて自慢の騎兵隊があるから、金ピカのクロちゃんには自信を持ってペルシアの要求を拒絶した。当然、ペルシアは攻めてくる。キュロス大王は、先ずエジプトと新バビロニアを牽制してリュディア支援が出来ないようにしてから大軍をトルコに進撃させた。クロイソスが期待したスパルタは丁度、隣の町とのトラブルを抱えていた。

現在のシリア、トルコ国境付近で両国の軍勢が遭遇し戦闘が開始された。両方とも相手を知らないから警戒していて戦いは五分五分：冬も近づいたので先ず金持ちのリュディア軍が戦争は次年度繰越と勝手に決めて引き揚げた。残されたペルシア軍には異国での地理、気象条件、民族風土などが分からず駐留に不利だから暗黙のうちに決戦は「来年の春」と思われていたのだが、キュロス大王は密かにリュディア軍の後を追っていた。

ペルシアの騎兵は極めて少ない。戦闘に備えてペルシア騎兵は後方部隊に回った。軍団の先頭を切って進んで行くのは駱駝(らくだ)部隊である。出陣したときは駱駝が輸送部隊として荷物を運んでいたのだが、キュロス大王は現地で駱駝の荷を騎兵の馬に背負わせ、双方の任務を交代させたのである。駱駝は荒地に強いし半砂漠地帯出身のペ

ルシア軍は駱駝の扱いに馴れている。

引き揚げたリュディア軍が首都のサルデイスに到着して後ろを振り返った時、そこには敵の大軍も一緒にいた。クロイソス王は自慢の騎兵隊を揃えて一気にペルシア陣営に攻撃をしかけた。さしものペルシア軍も、装備が万全で十分な予算をかけて訓練されたリュディア騎兵に蹴散らされて退却する：予定の筈だったが、事態は急転した。

敵陣に向かっていたリュディア騎兵隊の馬が立ち止まって進むうとしない。それどころか、方向転換をして戦場を離脱し始めた。ペルシア軍の最前線には見慣れない駱駝部隊が配置されていたから純情な馬は奇妙な駱駝の格好に恐れ、馴れない動物臭を嫌って逃げ出したのである。リュディア軍は大敗を喫してサルデイスに籠城した。

ペルシアの大軍に囲まれても城は堅固だから容易には落ちない。その間に救援が来るであろう。クロイソス王は山と積まれた金貨を眺めながら一安心していたのだが、予想も出来ないところからサルデイス城は陥落することになった。

或る日、城で見張りをしていたリュディアの兵士が気を抜いて兜を脱ぎ、それを誤って城外に落とってしまった。その場所は城の死角になっていて攻める側も気がつかず、護るほうも手薄にしていたところである。兵士は城壁からロープを垂らして下に降り、落とした兜を拾って何事も無かったように城の中に入った。ところが偶然にその様子を目にしたペルシアの兵士がいたのである。

このことはキュロス大王の耳に入った。ペルシア軍はその場所から攻め入って城を落とすと伝えられている。捕えられた金持ちの王は焼き殺される予定であったが、途中からキュロス大王の気

が変わって助命されることになった。リュディア王国は消滅したけれども、クロイソス王はキュロス大王に従い多くの助言をしたようである。

ところで、既に述べたようにリュディア国内に多くのギリシア人が居住し殖民都市を形成していたから、その主権がペルシアに移ったことはギリシア系住民に多大の影響を与えることになった。

クロイソス王の治世には税金さえ納めていれば自由な交易が許され、リュディア政府も細かいことを言わず、ギリシア人が思うように生活していた。何しろ王様が金持ちなので税も高く無い。

「苛政(かせい)は虎よりも猛(たけ)し」という諺がある。孔子の伝えた話で家族が三人も人食い虎に殺されたのに、その土地に留まっている民に理由を聞いたところ「この地は政治が良いから」と答えた―過酷な政治は虎よりも人民を苦しめる―今の某国に虎は居ないが、手腕も能力も政策も無いのに人気取りで選挙に勝ちさえすれば夫婦で外遊が出来る恩恵を狙って狐狸が総裁・総理に成りたがる。良い政治が出来る訳が無い。

金持ちのクロイソス王から野心家のキュロス大王に支配権が移ったリュディア国内では、在住ギリシア商人たちが一番に「苛政」の影響を受けた。彼らは「イオニア」と呼ばれるリュディアの沿岸部と多くの島々に住んでいた。キュロス大王はリュディアを攻めるに先立ち、イオニアのギリシア系住民に対して通牒を送り「リュディアを攻めるから反乱を起こすように…」言ってきた。

しかしペルシアを知らない商人たちは、まさかリュディアが負けるとは思わず、キュロスに返事をしなかった。クロイソス王が捕らえられたと知って慌てて占領軍司令部に使者を送り「…これま

でクロイソス王に隷属していた条件でキュロス大王に服従します」と申し入れた。

ギリシア植民地からの使者の言い分を聞いたキュロス大王は何処かで仕入れたのか、自分で考えたのか、次のような話を使者に聞かせた。

「…ある漁師が居た。この男は笛吹き名人であつた。投網を打つのが面倒になり、自分が吹く笛で魚が出てくるかと思ひ海面に向かつて一心に吹いたが魚一匹顔を出さなかつた。漁師は投網を出して沢山の魚を捕らえた。魚が暴れ回る様子を見て漁師は魚に言った―騒ぐのは止める…俺が笛を吹いてもお前達は踊ろうとしなかつたではないか、今頃になつて踊つても遅いぞ…」

「この魚はお前たちギリシア人だ！」

キュロス大王の言葉はイオニアに於けるギリシア系植民都市の破滅を意味していた。多くの植民都市は店を畳んで昼逃げ夜逃げを敢行したのだがエーゲ海のキュクラデイス諸島を望む海岸地帯にあつたミレトス市だけは指導者がキュロス大王にうまく取り入つて「御用達」の鑑札を貰つた。

人間の欲望にはキリが無い。ミレトスは競争相手の商社の多くが撤退して「独占禁止法」に触れる寸前の商売が出来た訳だが、後に大ローマ帝国と戦う北アフリカの国「フエニキア」が地中海やエーゲ海に進出してミトレスの売上に影響し始めたのを機に、海賊業に手を染めたのである。勿論、親分のペルシア帝国から内諾は得ていた。

利益に目が眩んで本来の商売以外に手を出し大火傷をした挙句に会社そのものを失う例は多い。ミレトスも慣れない海賊業で大赤字を出したのだが赤字額が大きくてペルシアには報告出来ない。困った指導者は苦肉の策でペルシアに対するギリ

シア人の恨みを利用して反乱を起こさせることを思いついた。クロイソス王の時代に優遇されていたギリシア人たちは、占領者のペルシアに対して100%不満を持っている。その頃、キュロス大王はリュディア占領地を重臣のハルパゴスに任せていた。嬰兒キュロスの命を助けたために、息子をメディア王に惨殺された人物である。既に述べたように、キュロスの母親の国ではあつたが宗主国としてペルシアが隷属させられていたメディアからの独立を果たせたのも

このハルパゴスの力であつたから、キュロス大王は全面的に信頼している。占領地の統治もキュロス大王の方針どおりに厳しい。

キュロス大王のほうは、捕虜にしたリュディア国王のクロイソスを伴つて奥地に潜む遊牧騎馬民族の征伐に向かつていた。遊牧騎馬民族は古代から多くの部族が居たが、キュロス大王の時代にはスキタイとかキンメリアとかマツサゲタイとか呼ばれる連中が黒海からカスピ海方面に潜んでいて気が向くと出稼ぎで荒らしに来る。

ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会は、今年6月で4年目を迎えます。

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会

月末(最終土曜日)に勉強会を行っております。

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063
打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178
伊東 弓子 0299-26-1659

「風の会」 URL:<http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

リュディアは侵入してくる騎馬民族と何度も戦っている、敵の様子を知るクロイソスがあれこれと助言してくれる。案内役としては最適であるし、何よりも世界一の金持ち王様であるから、捕虜にはなってもヘソクリは十分に持っている。同伴する相手としてもびつたり的人物である。

結局、キュロス大王は西に進んで来たけれども、途中から騎馬民族が気になって仕方がない。息子のカンビュセスに本国の統治を任せ、征服したリュディアは腹心に任せて、暫くは遊牧騎馬民族征伐に掛かり切りになる。少年時代に牛飼いの子として育てられた所為かも知れない。

六十歳を過ぎたキュロス大王は定年制を意識したのかどうか、紀元前五三八年から八年間はペルシア帝国に戻り国内の整備に力を注いだ。長男のカンビュセスは「バビロン王」としてメソポタミアの統治を命じられた。次男のバルディアは東方属州の長官として辺境を抑えていたのだが、ここで歴史の定番でもある相続を巡る兄弟の対立が起こる。それでなくても辺境は統治が難しい。

紀元前五二九年、次男が支配する東方辺境での反乱が起こった。七十一歳のキュロス大王は自ら現地へ出かけ、生きて戻ることは無かった。その死には多くの謎があると言われる。遺骸はペルシア帝国の故地パサルガダエに築かれた石造の霊廟に安置された。この霊廟は切妻型日本家屋の原型だとする説もあり、全く同じ形をしている。

キュロス大王の死後、兄弟の対立が深まりバルディアは兄のカンビュセスに暗殺されたことになっている。しかしカンビュセスがエジプト遠征で死亡すると「俺がバルディアだ！」と言うものが出てきて騒動になる。これを解決してペルシアの

王となるのは、キュロス大王とは血縁の無い一族末流のダレイオスであった。

さて、キュロス大王が占領した後のリュディア王国で、抑圧され続けたギリシア殖民地市民の不平不満を利用したミレトス市指導者の反乱計画があったことを述べたが、その運動が本格化するには当然ながら長い時間がかかった。小規模な抵抗は何度も行われたが、その度に鎮圧されていた。

エーゲ海沿岸部イオニアのギリシア系住民たちが、ペルシアの支配に対して本格的な抵抗運動を行ったのは紀元前四九八年、ペルシアの国王がダレイオス大王になってからのことである。

密かに練られていたペルシア本営の襲撃計画をリュディア人は知っていたのだが、自分たちも占領されている立場であるから、見て見ぬふりをしていた。或る風の強い日にイオニアのギリシア系市民たちは首都サルデイスのペルシア行政府を襲撃した。サルデイス城はギリシア系民衆に奪われ、各所に火の手が上がって反乱は成功した。

ところが騒動の火が或る神殿に引火して神社を全焼してしまったのである。それがリュディアの民が信仰する「キュベレ神殿」であったから事件に背を向けていた本来の市民が怒って、ギリシア人を追い出す騒ぎになった。キュベレ神とは紀元前一千年代からアナトリア高原（トルコ地方）で信仰されていた地母神のようで、獅子の姿で戦車に乗っているというから恐ろしい女神である。

悪いことは出来ないもので、或る指導者の不純な動機から始まったペルシアに対するギリシア系住民の抵抗運動は、リュディアの国民を巻き込んで大きな騒動に発展することになった。

追い詰められたギリシア人たちは、エーゲ海沿

岸都市やキプロス島などで相次いで反乱を起こしたが結局はペルシア軍によって鎮圧させられた。事件を画策した張本人のミレトス市はしぶとく抵抗して二年ほど持ち堪えたがそこで終わった。

ドラマでも犯人として真っ先に疑われるのは事件で得をする奴と決まっている。ミトレス市が滅んだ後の商売をアテネ市が一手に引受けていたために、ペルシア政府は臭い？と睨み、反乱の黒幕はギリシア本土にあり！と判断した。

後にペルシアの大軍がギリシアを襲い、それから百三十年も経って忘れた頃にアレキサンダーが東方に遠征してくる――大事件の遠因は歴史に埋もれた些細な出来事の連鎖にあった。

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）
詩を手話で舞う「朗読舞教室」（講師：小林幸枝 白井啓治）
エッセイ教室（講師：白井啓治）
朗読教室（講師：白井啓治）
（各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円）

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」(担当：白井)
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。

ふるさと文化市開催のお知らせ

人の流れを創造しよう!!

自慢すべき美しいふるさと。この美しいふるさとに今欠けているものは、人の流れを創造しようとする知恵と情熱です。この度、ふるさと常世の国に新しい人の流れを創造しようとして、ふるさと自慢を大声する仲間が集まり、「ふるさと文化市実行委員会」を設立することとなりました。

ふるさと文化市実行委員会では、活動の第一段階として、ギター文化館を発信基地として朗読舞劇「常世の国の恋物語百」に挑戦することは座の定期公演日に、ギター文化館様のご協力を頂き、駐車場にて「ふるさと文化市」を開き、ふるさとの素晴らしい風景の中に人の流れを創造して、「ふるさと文化市」になりまいた。

ふるさと文化市実行委員会では、幅広く参加者・参加団体を募集しております。

21年度第一回ふるさと文化市は、4月19日に開催いたします。

詳しくは「ふるさと文化市実行委員会」(代表世話人：松山有里 0299-443558、E-mail: yurifutaba@7.dion.ne.jp)又は「ふるさと文化市実行委員会」(ふるさと文化市実行委員会参加団体) へお問い合わせください。

ふるさと文化市実行委員会参加団体
ふたば自給農園・ふるさと風の会・ことば座・工房才力
リナアートJOY・いしおか補聴器

「この道を常世の国の文化ロード」

白井啓治

三年前に、小林幸枝さんと朗読舞劇団「ことば座」を設立し、発信基地を何処に定めるかで、近隣地域の劇場を見て回った。

ことば座は、物語や詩の朗読を「手話を基軸とした舞いに表現する」という、世界に例のない、舞台表現の既成を突き破った表現集団である。そのことから、発信基地となる舞台も、「演劇のための劇場」という固定観念を超える場所が良いと考えていたのであった。

しかし、公民館的多目的使用を考えたスペースしか持たない地方にあつては、既成の舞台スペースではないものを求めることは無理な事であった。いくつかの候補を回った後に、石岡市柴間に、ギター演奏の為の世界的な空環境をもったギター文化館というホールのあることを知り、ダメもとで見に行ったのであった。

芸術家としての視点、志向においても重大なことである「既成を打ち破る」「型破りをする」を忘れかけていた私に、ギター文化館のホールは強烈な横ビントをくらわしてくれた。表現者と観客が一つの心臓と血流を繭玉の中に共有し、感じ合える空間は、世界中を訪ね歩いてここにしかない、と。

巨木をくり抜いて出来たほこらの様なホールの中央に立った時、天上から降り注がれる温もりの波動は、小林幸枝の手話という動作言語の揺らぎにぴったりとマッチし、常世の国の恋物語を発信する基地はここしかないと思つたホール使用を、代表の

難色を示されると思つたホール使用を、代表の

木下氏は私達の趣旨や思いを汲み、即断にOKの返事をいただいた。その日以来、ギター文化館に通わせてもらっているのであるが、北海道の富良野を思わせる嘉良寿理から柴間、そして瓦谷に抜けるこの道の風景の素晴らしさにすっかり魅了されてしまった。ギター文化館へ行く手前にあるレストラン「ふらの」の Pasta の味も悪くない。今では、ギター文化館での稽古の後の食事は、ふらのと決まっている。

ギター文化館から眺める里山の重畳は風と季節の流れに一体となって絶景を見せてくれる。木下代表は、この風景を八郷のアルハンブラと称している。旧八郷町の里山が日本百景に選ばれたのだそうであるが、当然であろうと思う。

氏とは、同じ浅草・隅田川周辺に育ったこともあり懇意にさせて頂いているが、ギター文化館のある通りを常世の国の文化ロードと呼ばれるものにしたものと話していたのであったが、公演の手伝いに来てくれたふたば自給農園の松山有里さんから、この素晴らしい場所での人の流れを創造することが出来たら嬉しいですね、の一言があり、「ふるさと文化市」の実行委員会が設立された。里山百景を抜けるこの道が、正真のふるさと文化ロードになってくれることを願うものである。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発：ことば座第13回定期公演
歴史の里石岡で最も大切にしたい舟塚山古墳から眺める常世の国の風景。その風景をモチーフに創作された白井啓治会心の不思議の物語2作品の朗読劇。

「霞ヶ浦の紅い鯨」「古里は春の夢」

4月19日(日曜日)開演午後2時

脚本：演出 白井 啓治 出演：朗 読 しらみひろぢ
美術(背景画) 兼平ちえこ 手話朗読 小林 幸枝
(装 美) 小林 一男

霞ヶ浦の紅い鯨より...

「おねえちゃんね、夢って、寝てる時の目で見えるものなんだよ。だから夢って本当のことなんだって」

× × ×

「お爺ちゃんに、霞ヶ浦に赤い鯨がいたら良いね、って言ったら、いるよって言うんだ。信じていたら必ず見られるよって言うから、僕ズーッと信じていたんだ。そうしたら見られたんだ。赤い鯨なんだぜ。すごいでしょう！」

古里は春の夢より...

生きるだけなら一人でも生きられます。

でも、暮らしの布は一人では紡げません。

「ふるさと」もそうなんでしょうね。

二人で暮らしの布を紡がなければ「ふるさと」は「ふるさと」でなくなり、殺伐する生活だけがギスギスと残るのでしょうね。

ふるさととは何か、ふるさとに暮らすとはどういうことか、生きるとはどういうことか・・・ふるさとの自慢すべき舟塚山古墳から眺めた風景をモチーフにして、未来を紡ぐ子供たちに向けて、また夢を忘れようとしている現代の大人たちに向けて、脚本家白井啓治が問いかける心の夢の物語。今回の春の夢では、朗読舞女優・小林幸枝の希望で、舞詩が加筆され、桜吹雪の中に幻想の世界をみることができます。

兼平ちえこの描く常世の国の五百相は、もう三百相に達します。あなたの心の顔を見つけ出す事が出来るかも知れません。

入場料3,000円 (前売券2,500円)

前売券は、**ギター文化館** 0299-46-2457 **いしおか補聴器** 0299-24-3881 で取り扱っております。

ことば座 茨城県石岡市府中5-1-35 0299-24-2063 Fax 0299-23-0150